

小竹貝塚の編物復元

とっておき埋文講座②

はじめに

当センターでは富山市の小竹貝塚出土品を常設展示しています。小竹貝塚は厚さ2mを超えるヤマトシジミ主体の貝層や91体もの埋葬人骨で有名な縄文時代前期の遺跡ですが、低湿地性貝塚という特徴を持つため木や縄など有機物の残存状態も良好です。出土品の中には、ヒノキ科の植物で作られた編物もあります。



小竹貝塚出土編物（遺物番号3192）

編物の縦材はヒノキ科の木の芯の部分、横材はヒノキ科の内樹皮です。縦材は幅4mmに割った木の芯2本を1単位とし、幅1.5mmに裂いた内樹皮の横材で上下を挟んでもじり編みしています。細密で丁寧につくられた編物です。

富山県埋蔵文化財センターボランティアの得能かちよさんは縄文編物の復元に取り組んでこられ、2020年2月に、ご自身で製作した編物を寄贈して下さいました。これをきっかけとして、当センターでも復元にあたることになりました。復元作業の詳細については来館者へ配布している「MAIBUN 小竹貝塚研究プロジェクト」Vol.7～10で報告してきましたが、作業を通していくつかの発見がありましたので、改めてまとめてみたいと思います。



埋文ボランティアの得能かちよさん(左)当センターに来館され、復元した編物についてお話し下さいました。

素材の採取時期は、仕上がりを大きく左右する

編物の素材はヒノキの枝です。埼玉県秩父郡長瀬町在住の根岸捷男さん^{ながとろまぢ}のご協力のもと、枝を採取しました。



ヒノキの植樹林（埼玉県秩父郡長瀬町）

春～初夏に枝を伐採すると、切り口が腐って病害虫もつきやすくなります。しかし樹皮を得るためこの時期の枝が必要ですので、建築材にならない木を選び、下の方の枝を数本切り落としました。



ヒノキの枝（2020年4月28日伐採）

長さ52cm～1m20cm、根元の太さ0.8～1.5cmの枝を18本採取しました。

春～初夏の季節、樹木は根から水を盛んに吸い上げて大きく育ちます。木の内部構造をみると、内樹皮の内側に道管という水の通り道ができています。春の木のみ発達した道管が境目となるので、樹皮がきれいに剥がれるのです。春以外の季節の樹皮は芯にしっかりくっついていて簡単には剥がせません。

樹皮は自然素材ですので、四季に応じた植物の成長サイクルの中で、艶や



春採取の枝から樹皮を剥がす

枝の表面を石で軽く敲くと、樹皮の表面が縦に裂けてきます。樹皮の裂け目に沿って指を入れると、簡単に剥くことができます。



剥がした樹皮を指で裂き、水にさらす



樹皮の表皮を竹べらでこそげ落とす

ゴワゴワした表皮の下から白く丈夫な内樹皮が現れます。これが編物の横材になります。

張りといった見た目のほか、厚みやしなやかさ、強靱さといった質も変化しています。どの季節に素材を採取するかということは、製品の質や仕上がりの美しさを大きく左右するのです。

縄文人の高い技術① 条材加工

編み目が整然と並ぶ編物を作るには、条材が良質で太さが均等であることが大前提です。小竹貝塚の編物の縦材は幅4mm弱に細く加工したヒノキの枝の芯です。堅いヒノキをこれだけ細く削り節のないまっすぐな条材に加工するのは、かなり大変な作業です。

磨製石斧でヒノキの枝の加工を試みましたが(下写真)、石斧の刃が鋭利ではないので切るにも割るにも枝の端が

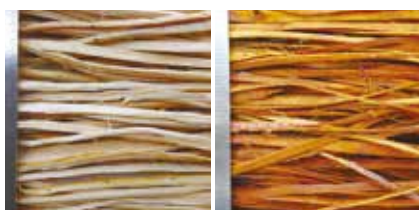


磨製石斧を使って縦材を加工する

樹皮を剥がしたヒノキの芯を、長さ25cm位の扱いやすい長さに切断し(左)、縦に割り裂いて(右)分割材を作ります。

つぶれてしまい、どうしてもボロボロになってしまいます。今回は効率よく作業を進めるため、ノコギリ、ナタ、小刀を使ってしまいましたが、鉄器のない縄文時代、一体どのようにして整った編み材を製作したのでしょうか。

一方、横材は幅1.5mm弱のテープ状に細く裂いた内樹皮です。内樹皮は指で簡単に裂けますが、これ以上細くするとちぎれてしまうギリギリの幅です。これをできる限り長くとります。



編物の縦材(左)と横材(右)。
実際の出土品と見比べながら、素材の寸法や質感が同じになるように作りました。

縄文人の高い技術② 編む

小竹貝塚の編物は断片ですので本来の形は不明ですが、出土品を観察して、中心から渦巻状にもじり編みした円形の編物であると想定しました。このような編物の出土事例はありませんが、縄文土器の外底面に編物圧痕という痕跡が残っていることがあります。それらを参考として復元案を考えました。

まず骨材となる長めの条材3本を組んで中心を固定します。縦材の上下を横材で挟み、1本ごとにもじり編みします。1周したら骨材の間隔が空いている部分に縦の条材を差し込み、編み進めます。縦材は最初1本ですが、隙間ができる度に不規則に増やして2本1組にし、編み目が大きくなってきたら分岐させていきます。これが編み目の細かさを保ったまま、編み物を大きくしていく方法です。

縦材はなぜ2本1組なのか

全国から出土したもじり編みの編物の中でも縦材を2本1組とするのは珍しい事例です。縦材はなぜ2本必要だったのか、その理由は分岐させ編物を大きくしていくためだと考えられます。出土品をみると、分岐は頻繁かつ不規則に現れます。自然な枝の屈曲にあわせた不規則的な分岐が、意外にも美しい編み目をつくりだしているのです。



編む(1)

条材3本を組み合わせて骨材とし、中心を固定します。横材を通して時計回りにもじり編みします(黄色矢印)。編みながら骨材間に縦の条材を差し込んでいきます(赤矢印)。



編む(2)

進行方向(黄色矢印)に向かって右回り(茶色矢印)に横材をねじります。



編む(3)

縦材を次々に差し込み、縦の目を増やしながらか編み進めます。縦材はまだ1本です。

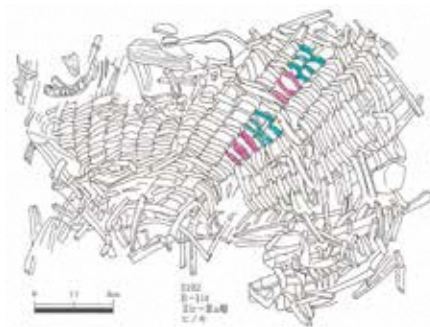


編む(4)

縦材間に隙間が空いてきたら、新たな縦材を差し込んで2本1組にします。何周か編み進めたら、2本の縦材を分岐させて編み目を細くします。分岐させた2本の縦材にはそれぞれ新たな縦材を差し込み、2本1組にします。

製作者は右利き

編物の中心を手前に置き、右手で円周上を時計回りにもじり編みをするとう出土品と同じ編み方になります。この時、横材が左下から右上奥に入るので右利きの人にとって作業しやすい方向



小竹貝塚の編物実測図(遺物番号3192)

横材を色分けして縦材が分岐していく様子を示したもの。赤の1本から青の2本へ縦材が分岐しているのがわかります。



復元品拡大(部分)

です。しかも横材を手前側(円の中心)に向かって締めながら編めるので、固くしっかりとした編み目になります。

製作技法が途絶えた理由

現在、私たちの身の回りにこのような編物はありません。なぜ途絶えてしまったのでしょうか。

現代のザルやカゴは縦横の条材がしっかり組まれた丈夫な構造ですが、小竹貝塚の編物は縦材の大半が中心を通らないため固定が弱く、縦材が脱落しやすい欠点があります。こうした構造上の弱さが後世に残らなかった理由なのかもしれません。

編物の用途は？

編物は軽いため持ち運びには便利ですが、この編物は壊れやすいので海や山へ気軽には持っていきません。また編物は通水性に優れているのであく抜き等の水さらしに用いられることが多いですが、これは目がぎっしりと詰まっているので水さらしにも不向きです。

残るはヒノキが持つ抗菌効果です。食べ物の天日干し、つまり魚の干物や干し貝づくりに使われたのかな…と想像しています。

(朝田 亜紀子)